

秋期福音特別集会（4）（京都）

主の祈り

——マタイ伝第6章5～13節——

1973年11月24日

小池辰雄

隠れたるに見給うなんじの父 祈りたることは聴かれたりとせよ シュヴァイツァーの「つけ
 たり祈」 顧みざる顧み 全存在が主の懐の中に 何か窒息しそうな気持 聖意体現 無一
 物無尽蔵 十字架の下で解決 千秋不動一声仁 祈り

【マタイ6】

5 なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕あらわさんとて、会堂や大路の角かどに立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報むくいを得たり。6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて隠れたるに在います汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。7 また祈るとき、異邦人の如くいたずらに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思うなり。8さらば彼らに効ならぬ、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要なる物を知りたもう。9この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願わくは御名の崇あがめられん事を。10御国の来きたらんことを。御意の天のごとく地にも行われん事を。11我らの日用の糧かてを今日もあたえ給え。12我らに負債おいめある者を我らの免ゆるしたる如く、我らの負債をも免し給え。13我らを嘗試こころみに遇わず、悪より救い出したまえ」

●隠れたるに見給うなんじの父

5 なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。

「お前たちが祈る時に、偽善者のようであつてはいかん」

と。キリストは、つくつたのが嫌いなんです、偽善者というのは。それから、自分を義とする連中。偽善者も、自分を義とするのも似たようなものです。

彼らは人に顕あらわさんとて、会堂や大路の角かどに立ちて祈ることを好む。

祈りというのは、神さまとの一対一の——横の関係は全然ない——縦一本のもの。それを人の意識をもって人に表さんとしたら、全然間違っているわけです。横の関係があるのは、それは執り成しの意味のときは、その関係がありますけれども。それでも、それは直接には神さまに向かつての、執り成しをお願いしているわけです。直接に人に表さんというのは、



てんでおかしい話です。

彼らは人に顕あらわさんとて、会堂や大路の角かどに立ちて祈ることを好む。

まあ一般の教会での形式的な祈りですね――祈祷書なんてある――そういうのは全然、天には響かない。

誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報むくいを得たり。6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて隠れたるに在います汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。

「隠れたるに聞き給う」と書かないで、

「見給う」

と書いてある。

「己が部屋に入りて」

という。もちろん、これも自分の部屋でなくて、他人の部屋でも一向に差し支えない。「戸を閉じて」というのも、戸を開けても構わない。ただ、しかし、この気持は、この「己が部屋に」というのは、

「自分自身の中に、深く自分の中に」

ということですね。そして「戸を閉じて」ですから、肉の耳は閉じて霊の耳で、自分の中に入って霊の耳で、そして

「神さまー」

と、こういうことです。

それも我々には隠れている。この相對界には隠れている。五感には隠れている。けれども実は、それは靈界には一番露あらわにしておられるわけです。そういった、

「隠れたるに在います汝の父に」

と。ここは「汝ら」ではなくて、

「汝の父に」

と言う。

「お前の父に、お前の父なる神に」

と。イエスは、もう「神」というのは本当に「父」と言わざるをえないんですね。イエスさまは特別な神さまの子ですから、

「お父さん」

と言うわけです。ずんぶん大胆なわけですね、「お父さん」なんていうのは。

大体、「お父さん」なんていったって、お爺さんみたいな鬚のはえた人というわけでもないでしょうし。天地万物の創造者は、人間のような形をしているわけでもないでしょうし。ですから、もうこの「父」という言葉自身が、我々の相対的概念としても一番親しい、縦の関係としては「父」、あるいは「母」ですけれども。そういった非常に深い信頼です。あ



るところでは、

「神は霊である」

と言われた。ヨハネ伝4章ですね。霊神であり、父神である。これは、キリストが「父」と言われても、決して偶像にはならない。神は霊であるから。霊なる神を、きわめて人格的に「父よ」と。イエスは人間の姿をとられた。その意味において、その表現としては非常に親しい「父」という言い方になるわけです。

まあそういったところに、この聖書の宗教の、偶像にあらずしてしかも人格的にして、しかも完全に霊的な事態。もう既に神秘の世界です。それで、ひとつも観念されていないで、非常に具体的なんです。霊的具體性。霊的現実であり、霊的具體性の世界。その「父」に祈る。

「さらば隠れたるに見給う」

と。ちゃんと見てありたもう。また、もちろん耳で聞いていらっしやるわけです。この「見る」とか「聞く」とか「触る」とかという言い方は、旧約からしてずっとある。エホバの神さまはそういうように表現しました。そして決して偶像にならないというところに、聖書の宗教の、

「神は人格的にして霊的だ」

ということは貫いている。そういうわけです。

●祈りたることは聴かれたりとせよ

7 また祈るとき、異邦人の如くいたずらに言を反復すな。ことばをくりかえす

「南無阿弥陀仏」だの「南無妙法蓮華経」なんかは、たくさん繰り返しますが、あの繰り返しはもちろん要らない。法然は相当やりましたが、親鸞は本当の意味ではただ一回ということを、「一念」と言っています。

キリストの祈りはこの

「一念」

です。一念でありながら、それが自然に——キリストの「父よ」という言葉は祈りの中に幾回もお使いになりますけれども——これは自然に出てくるのであって、言葉のつなぎによく祈りでもって、言葉につまっつてちよつと言いくいと、「父よ」なんて言い出したり、ああいう軽く呼んでいるのはよくない。

「主よ主よと言ってもダメだ」

という。問題はいつも、

「それがまことであるか、全存在的であるか」

ということだけです。回数は別に問題でない。

彼らは言多きによりて聴かれんと思ふなり。さらば彼らに效うな、汝らの父は求めぬ前に、なんじらの必要なる物を知りたもう。



本当の意味で必要なもの。自分たちが必要と思うものは、あるいは必要でないかもしれない。そのところが、私たちの願いよりもっと大事な必要なものを知っていらつしやる。それを祈りそこなっていたら、祈りは聴かれない。聴かれないときは、もっと深いものが聴かれている。だから、私たちの祈りがまことでさえあれば、それがそのまま聴かれるときもあるし、それとは全く逆な具合に、聴かれないと思われるように聴かれることがある。要するに、一番深い意味においては、本願が成っていくんですから、聴かれている。我々の願い以上に聴かれている。

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

という。「既に聴かれたりとせよ」と、その「聴かれたり」ということはもっと深い内容を持つているということを担当に、本当のこととしていなければ、力はこないですよ。

「私はこう祈っているんだが、その結果はどうなるだろうか？」

なんてね、結果を思っているような祈りだったら、それはダメなんです。結果はお任せです。お任せして、しかも、聴かれないと思つて、相対的な現実としてはガツカリするかもしれない。けれども、もうひとつ奥に大きな理由ゆえがあつてのことであると。そういうことを図太く受けとつていく。神の愛というものは、神の顧みというものは、我々の願い以上である。こういうことです。そうでないというと、それは御利益信仰になる。

「ああ、これは聴かれた。あれは聴かれない。もっと祈りが足りなかつたかな」
なんてなことになってしまう。

もう非常に現在のですから。これは御霊の世界を、御霊を頂いていると、そのことはそういう確信ならざる確信がくる。たとえば、もう死に瀕しているような病の人がある。それは是非とも治していただきたい。けれども、治らない死の病がある。それが聴かれないことは、もうひとつ奥に、実は治して頂きたいという願い以上に——即ち「往生」だな、往きて生まれるという——「往きて生まれる」ように聴かれていることに貫くわけです。

ですから、相対的にいわゆる生きるも死ぬるも大したことではない。本当の意味においては、永遠の生命の、本当に浄福の世界を、大歓喜の世界を神さまは下さるうとしている。ここに勝利があるわけですね。

そうなつてくると、我々の祈りというものは全部、本願に即するわけです。願いたいこととは何でも願つてください、子供のようにな。けれども、

「汝の御意を成させたまえ」

という祈りと、願いたいことを願うことが一つなんです。方程式のように、

「どうぞ御意を成させ給え」

なんて、体裁のいいようなことを言つたつてダメです。大いに祈つて、あるときはキリストは

「しつこくいくらいにまで祈れ」



なんて言っているんです、ルカ伝18章で。

「あんまりしつこいから聞いてやる」

なんて。そういう具合に、この現実の事態は、決して公式(方程式)ではなくて、その時その時に天の法則がある。それがいわば実存の法則ということですよ。

もう実に無軌道、無道の道ということ。靈法の世界は、

「これが靈法である」

なんて初めっから決まってるやしない。そういう呼吸がわかってくるためには――「ため」ということでもないけれども――その秘訣は本当に祈りながら完全に明け渡すことです。祈りながら完全に明け渡していることが、

「御意を成させ給え」

ということ。それはどつちも本ものなんです。わかりますか。

そういう祈りになると、これは力がくる。祈っていると力がくるんです。そして、人のために祈っても、必ずそれは何らかの意味において響いている。その人は知らない。甲の人は乙の人が祈っていることを知らないけれども。

あるいは、夜、私は祈ることがあります。そうすると、床の中で私は平伏してしまう、うつ伏してしまふ。坐らない。そういう祈りもいたします。とにかく、形はない。

キリストのゲッセマネの祈りの姿を、私はこの『聖意体现』の本(1959年12月20日、曠野の愛社発行、『聖霊の翼の蔭に』の改題・再版)の表紙にデューラーの描いた絵を引用した。キリストは地べたに十字架の形をして祈っている。これが祈りの在り方です。

● シュヴァイツァーの「つけたりの祈り」

9 この故に汝らは斯く祈れ。

こんなようにまあ祈ってごらんと。「斯く祈れ」と言うと、「これは祈りの方程式である、祈りの公式である」なんてなわけで、全世界の教会では「主の祈り」を暗記して称える。

「主の祈りは十字架に架けられてしまっている」

と、ルッターが言いました。空念仏になっっているから。私たちは大体は知ってますけれども、この祈りを全部そのまま祈ることはほとんどないね。その中のいくつかは適当に出てくるけれども。

これは正直、この短い祈りに本当に福音の全部がこもっている。

私は『聖意体现』に書きましたけれども、シュヴァイツァーさんがこの「主の祈り」を小さい時にお母さんから聞いている。彼は小さい時から非常に憐れみの心のある人だった。

「私に不可解に思われたことは――それは字童以前のことでしたが――夕の祈りで人間のためにのみ祈るように教えられていたことでした。それゆえ母が私と共に祈って、私にお休みの接吻をしてくれたとき、私はいつもなお、ひそかに自分で作ったつかけたり



の祈 (Zusatzgebet) をすべての人々に代ってするのでした。それは『愛する神さま、すべて氣息をして生きてゐるものを護って恵んでやってくたさい。すべての禍害から防ぎ、やすらかに眠らせしめてくださう』と云つたのだ。』(Albert Schweitzer: "Aus meiner Kinderheit" 46)

シュヴァイツァーさんは、彼の人生哲学の

「生命に対する畏敬の念」 ("Ehrfurcht vor dem Leben")

を、もう既に小さい時から、その種は、胚珠は、双葉はちゃんとあつた。それが大きくなつて、あるときオゴエ河を遡つている時に、豁然としてパツときたということが書いてある。生きとし活けるものを殺してはいかんと。彼は虫ひとつ殺さない。そういう祈りを彼はもう小さい時に、自然に彼の魂はそうであつた。そして、それが大きくなつて実践している。彼の人生哲学になつている。だから、キリストは、

「ああ、シュヴァイツァーはそういうことを付け加えたか。本当に可愛い子だ。天

使のような魂だ」

と思われたでしょうね。……

「天にいます我らの父よ」

この「天」というのは霊界の天ですが、東西古今を通じて、霊界を表すのに共通ですね。支那でも「天」です。ヨーロッパのキリスト教やユダヤでもみな「天」です。やはり、天地という、この天というのは、空間的に我々の頭上にあるものは、やはり霊的空間においても「上なるもの」というわけで、

「天にいます」

と言う。

「我らの父よ」

と。キリストには本当に「お父さん」ですから。ただ私たちにおきましては、もちろん「父よ」と祈れますけれども、私はある時からもうすつかり、

「主よ」

になつてしまった。私は「主よ」と祈るけれども、あなた方は真似しなくなつていいよ、「父よ」だつていい。いいけれども、私はキリストに、救い主キリストに具体的に祈らざるをえないものですから、「主さま」と言うわけです。

この「主よ」と「父よ」は一つ。父なる神は本当に主において、キリストにおいて私たちに救いを、実際のことをキリストを通して、キリストにおいてなきつた。だから、「主よ」の奥にはちゃんと「父よ」があるわけです。そういう意味でもつて、どっちを祈っても同じことです。ただ非常に直接的には「主よ」なんです。

「われによらずば」

であるし、「私を通して」であるから。「父よ」あるいは「主よ」と。「在天の我らの父よ、



あるいは「主よ」と祈るわけです。

我々の魂は天に向かって開いてなくてはダメです。祈る時に、うつむいて祈るのが教会で普通である。あるときは私ももちろんそういう姿勢で祈ることもあります。けれども、キリストは天に向かって、あるいは両手を挙げて祈られたらしい。ユダヤ人の祈りもだいたいそういうのがあるようだね。即ち、霊界に向かって魂の全存在を開いている。朝顔が朝の光に向かうように、向日葵ひまわりが太陽に向かうように。これは受ける態勢ですから。

●顧みざる顧み

「我らの父よ」

と。あるいは、「我らの父よ」はまず、

「わが父よ」

です。「なんじ」と言っているところがきつきました。「わが父」から自然に「我ら」になるので、いきなりただ「我ら」という意識よりも、まず一対一です、祈りは。集会で祈る時はもちろん「我ら」でもいいけれども。「我ら」と「我」が一つ。もういつもそうですよ、単数と複数が一つになる。

「それは単数ではないか、これは複数ではないか。どっちがこっちはよきそうか」

なんてね、そういう分析の意識でやっていたら、これは宗教の真理はつかめない。両極を持つているんです。渾然こんぜん一つにして溶かしている。「アブラハム」というときには、アブラハムの家族あるいはその族やからおよびアブラハム一人とが一つになっている。

それが「我ら」であっても「我」であっても、同じである。ごまかしているのも何でもありません。本当にそうなんです。どうも、分析的な、いわゆる頭のいい人は宗教の世界はなかなかつかみにくい。

「愚かなる者はと聴きき者よりもい

と書いてあった。バカほどいい。

我々の存在は、「父よ」と、あるいは「主よ」と呼ぶ時に我々は本当に存在する。

「我思うゆえに我あり」

ではない。私たちが存在しているということは、在らしめているものに対しての呼びかけがないときに、我々は在るということがない。たとえ祈らなくても、我々が在るということとは、「主よ、父よ」と、あるいは「お前」と言ってお前まへから呼びかけている。その呼びかけを、本願の声を、聞こえざる声を聞いている。

たとえば、子供が「お母ちゃん」と呼ぶよりも先に、「恵子ちゃん」「子どもの名」てなわけですよ。始めにお母さんの方が呼んでいらつしやるわけです。声は出さなくてもちゃんと魂は、心は呼んでいる。

これが即ち、神さまと私たちの関係、主と私たちの関係です。この意識、この絶対者と



の絶対関係において我々の存在は或る絶対性を持つ。手放しの絶対性では絶対にありません。これが即ち、祈りのもうひとつ奥の世界は、祈らざる先に神の声を聞いている。

「声前の一言千聖不伝」

という。声の前の一言は千の聖もこれを伝えることができない。これは

「体験によって魂がつかまなくてはいいかん」

という、こういう世界です。

そうになると、どっかい転んだと思つたら怪我をしない、守られている、というようなことも起きてくるわけです。

そういうような無意識の意識という、深層の意識というものがある。それです。空気は、「吸っている」なんて思つていたら、「面倒くさくてしょうがない。みんな何もしないで、空気を吸っている。そうでしょ。そのような具合に、我々の魂は聞かないのに、ちゃんと「呼ばれている」というような意識を常時持つているような魂の姿に段々なっていく。

そういうわけですから、

「父よ」

と呼ぶ前に、

「なんじ、お前」

という声が出てきていることを知つてください。

「汝らの願いを既に知つておられる」

ということがそのことです。

「汝らの呼ぶ前に、既に呼んでおられる」

というわけです。うれしいですよ。

良き先生はその生徒を皆よく名前でも知っている。私は落第生ですけどけれども、顔を見ればわかるんだけど、あれは何という名前だか分からないんだな。良き羊飼いは羊を――あの羊は皆同じではないから――よく知っている。そのように、我々を顧みる。「かえりみ」というのは素晴らしいことです。

「どうもちつとも先生は私を顧みてくれない」

なんて、時々妙なことを考える人があるようだ。顧みざる顧みというものがある。本当の深い顧みは、いわゆる顧みでないような顧みがあるんですよ。いわんや、キリストはそのようにしてこの私たちを顧みてくださる。

「どうも、運命環境は、自分には非常に不如意で、これは見放されているのではないかな」

と、「見放されているのではないか」と思われる時は、実は本当に顧みられている。そのことに俄然気がつかなくてはいいかん。

「谷底に落ちてしまったと思つたら、その時は本当に捕まえられていた」



と。そういうことです。

●全存在が主の懐の中に

「父よ」と呼ぶのは、もちろん御霊がきてなければ呼べません。それはパウロが言っている通り。「父よ」にしてもそうです。御霊がきてなければ本当に――それは空念仏に「主よ」も「父よ」も言うけれども、普通のクリスチャンは――御霊でもって救われて、力がきて、交通ができていたところには、本当に「主よ」「父よ」が言える。

ところが、「主の祈り」というのは何ですか。

「父よ！」

「主よ！」

この一言が本当は「主の祈り」の全体なんです。あとの書いてあることは全部、「父よ」「主よ」のこの一言の中に含まれる。それだけの無量なるものを、この「主よ」「父よ」という言葉に持つに至るまでは本当の祈りではない。

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

に一切がかかると同じように、私たちにおいては

「主イエス・キリストよ」

「父よ」

に一切がかかっている。もうそれでおしまい。「祈れません」なんてことは絶対に言わせないぞ。もう、

「主さま、アーメン！」

が一番素晴らしい祈りです。

「主さま、ハレルヤ！」

これが一番すごい。これが本当ですよ。もう、

「主さまー！」

と、その気合でもって祈って、全存在が、祈ると同時に全存在が主の懐の中にある。だから、「主よ、父よ」と言うとき、もう「天に在す」というのは面倒くさくなって、もう「父よ、主よ」とだけ。あまり体裁をつくってね、「斯く祈れ」と仰ったので、

「天に在すと言わないとうまくないか」

なんて、そうじゃないですよ。

「そんなものは略していい」

とキリストは言われる。「主さま！」と祈って、全存在が主の懐に入る。これが本当の「主さま」だよ。そうしたら、あとの祈りは全部入ってしまう、我々の祈りは。

今度は、夜中にあなた方は突然、



「主さまー」

と叫んだら皆びつくりしてしまう。そして目が醒めたりしてね、安眠妨害だ。その時は黙って祈りなさい。黙って沈黙の雄叫びで、「主さまー」と。そうしたらもう完全に御懐でもって安眠できる。『眠られぬ夜のために』なんていう本はいらないんだ。私は訳したけれども（笑）。必ず眠れる。眠られなかったら、それはまだ祈りが本ものでないから眠れない。

●何か窒息しそうな気持

汝の御名が聖として崇められん事を。

この「御名」というのが実に重いわけです。パウロもペテロもヨハネも、存在の中心に御名を携えていた。

「わがうちにあるものはキリストの御名である」

と、さきほどもお話した通り。この御名が実でありますから、主の御名を呼ぶと直ちにそこに力が爆発する。ですから、御名が聖として、この相對界、救い難いような混沌たる罪の世に対して、天国、天国的な存在です、この御名のあるところは。しかしながら、天国的な御名というものは——私たちこの極楽がこの穢土です——即ち現世に、罪の世に食い込んでくる。食い込んできて、ここに天国を展開する。

「天国は汝らの間にあり、うちにあり」

という。でありますので、聖なる御名はこの低いところまで食い込んできます。

「いと高きところに住み給う聖者は、砕けたる心の中に、魂の中にやってきて活かす」

という。イザヤ書57章15節。そういう事態でありますので、この聖なる御名は楽しい。私たちが救うところの御名ですから。そういうった救うところの、

「御名が本當に崇められるように、御名に栄光がきせられるように」

と祈る。だから、御名を携えて、それをもって人を救う。そして、御名の栄光が現れる。それをペテロがやった通り、パウロがやった通りに。

10 御国の来らんことを。

これは申し上げている通り、マタイ伝5章の、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国、御国はその人のものなり」

は、

「十字架によって霊が貧しくされて、ぶつ倒れて、平伏して、無とされる。そうすると、天国即ち聖霊のキリスト、キリストの恵みの支配し給う場、実、それが汝のうちにある。天国はなんじにあり。聖霊の我なんじのうちにある」

と響いてきたと私は言いたい。だから、天国は内側にきているから、いつも申し上げている通り、



「御国を来^{きた}らせたまえ」

という祈りが空念仏でなくなる。

まあね、皆さん、20代の方は元気だけれども、あと80年もしたら、向^こう側だよな。お互いさま、もう70、80年でも向^こう側です。みな向^こう側になるんですが、今から向^こう側の準備をしておかないとね。これはもう我々の人生の序の口だからね、地上は。人生の本当のところは向^こう側です。まだあなた方は若いから、何か寝言みたいに聞いているかもしれないが（笑）。私は寝言ではない。そろそろ近づいてきた。けれども、私の方があなた方よりも生きるかもしれないよ。

しかし、私は藤井先生の所に行ったときには、ちょうどあなた方の年配だ。その時にでも、私は終末の世界に対する確実な希望がなければ、何か窒息^{しそく}し、そう、な気持がしていました、もうその頃から。

「人生がもしこれでお終いだつたら、何とつまらないものだろう。どうしても、終

末の世界があつて、魂が本当にそこでもって永遠に生きる世界でなかったら」ということですね。

だから、聖国は既に御霊において、聖国はきている。本当ですよ。あなた方は天国体でしょ、天国人。地上にあつて、

「国籍は天にあり」

と言うけれども、国籍は天にあるものが既に地におろしてある。そしてここに天国を現じているわけです。今晚はこれは天国ですよ。天国は我々の胸のうちにきている。だから、必ずくる。想像ではないですよ。御霊の人は、

「必ずそれが来る」

ということをはッキリと、

「今ここに花がある」

というよりもつとハッキリと知っている。「信ずる」というよりも

「知っている」

といつてもいいね。まあ、普通の人とお話してね、話を通じないわけですよ。我々の世界というのはそういうものを、そういうところに魂が遊んでいるものだからね。

いいよ、いつ死んでも。私が死んだら、

「ハレルヤー！」

と言つてくれ。まあ『無者キリスト』でも書いたら、もうさつきと往^いこうかな。そういうわけで、パウロが

「早くキリストと一緒にになりたい」

なんて言っている。まあそうだよな。



● 聖意体現

10 御国の来らんことを

お前たちの中に来ていいるから、それがハッキリと非常に力強く祈られる。今、その内容が身近に現実でなかつたら、すべて偽りである。空転してしまふ。それからその次は大事なところですね。

汝の御意の成しとげられんことを、天におけるごとく地においても。

天国を今、天界においてのように、また地界のこの我々の中で、我々において、私を通して、という。『聖意体現』とこの本の名前をそうしたのは、正にこの一句にかかるわけです。キリストの、神さまの、無限無量の内容が、もう自在に我々の生活の中でもって実現していかなくは。「全的に」なんては言いませんよ。けれども、質的には全的ですよ、

「御意の成らんことを」

というのは。

だから、行動せざるを得ない。考えていたら、成りはしない。クリスチャンが一番本当は活動的でなければ、いられないわけです。その点では、仏教の悟りの角度とだいぶちがう。あるがままの我々は挺身しながら、どんどん変化していく。変化しながら展開して行く。だから、

「初めに行為あり」

というのは非常にその点で、言葉の一番具体的なものは手足に生ずるんです。手足の動き、口の動きよりも手足、からだの動き、働きです。やっぱり人間の心を一番動かすものは何ですか。

「あの人はこんなことをしてくれた」

という行為ではないですか。

「あの人はこんな親切な言葉を吐いてくれた」

と、それもありがたいけれども。非常に喉が渴いた時に、こっちが頼みもしないのに、

「お渴きでしよう」

というわけで、水一杯をくれる。そういう愛の行為というものが、これがやっぱり人を動かす。それが本当の言葉なんです。

そういうわけで、御霊は自在に動く。静中の動、動中の静、自由自在ということ。だから、非常に創造的なんです、福音の世界は。そして、思われたことがグングン実現していくような、ぶつかっていくような、体当たりしていくようなわけですから。そして、聖書は、そのようにして生きるときに初めて身についてくることは事実です。

だからデカルトの、

「我思つゆえに我在り」

は近代の間違った考え——哲学上はそういうことはある意味において言えるでしょうけれど



ども——それだったらダメです。もうシュヴァイツァーが、
「ダメだ、あれは」
なんて言っているんだから。そういうわけで、

「天におけるごとく地にいても」

と。これも天地相即しているわけです。地上を天上にし、天上を地上にしている。

それから、時間的にいうと、未来界を現在界にしている。現在界をまた同時に未来界にしている。終末の世界をちゃんと持っている。歴史の終末の世界をその質において今、現に我々は終末的現実を現前しながら動いている。まあ何という世界ですかね。こんなことは普通のクリスチャンにはわからんですよ。この御霊の世界は、もう時間を支配している、空間を支配している。パウロさんの福音の構造はそんなものを持っている。

だから、そのようにして実現するときに、

「ああ、主さまは私において生きてくださっている」

と。うれしくしようがないです。ルッターさんも言った通り、

「魂とクリストとが一つの体になる。一切となる。」

と。「一切となる」なんてな言い方を大胆にしている。

●無一物無尽蔵

「我らの日用の糧^{かて}を今日もあたえ給え。」

一日その日暮らし、一日一生です。

「江戸っ子は宵越しの金を使わない」

という言葉がある。今日儲けたら皆使ってしまう、みんな飲んでしまう——これは冗談ですが——そういう気合で、

「明日は明日にしよう。今日は今日でいい」

と、クリストはそう言われた。私の藤井先生がそれ式の生き方をした。先生が亡くなられた時にガマグチの中は空っぽ。貯金もなければ何も無い。借金もなければ、プラス・マイナス・ゼロ。先生は、しかし、著作を遺した。それが息子さんたちの将来の生活を支えた。藤井先生は「信頼」ということをよく言われた。本当に信頼の人です。

もう年末になるとボーナス騒ぎをやっているけれども、あんなものは気にしない方がいい。私は経済観念がないせいだね、ひとつは。全然、どれくらい俸給を貰っているかなんて、始めっから計算したことがない。……本はすぐあるよ、僕の所はね。古本屋を始めたつていい（笑）。まあどうせ、次の世界に何も持っていけないですよ。本くらい持っていて、向こう側で読みたいけれども、それもできないのはちょっと残念だがね。……しかし、クリストの生命を本当に生きて、もう私は何も要りませんと。パウロが、

「有れども無きがごとく、無けれども有るがごとく。一切の秘訣を得たり」



と。正にそれなんです。とらわれない。有る無しなんて、相対的に

「有る、無い」

なんていうことではなくて、それはもう非常に豊かである。何もないと、無一物無尽蔵という言葉がある通り。無一物無尽蔵というと、

「さあひとつ無一物にならなくはならない」

なんて、無理してみんな売ってしまったら、あとから

「困った、困った。あれをまた取り返そう」

なんて、そういうことではない。相対的なものは、あるがままで乗り越えてしまっている世界なんです。だから、それを自在に使うことができる。これが即ち、

「日用の糧を与えたまえ」

ということ。買い占めをしたり、売り惜しみをしたらいけませんよ。ちゃんと書いてあるんだ。だから、一般の人にそういうようにお話しするといいわけだ、あなた方は。「聖書」なんて言わなくていいよ。

「こんな本があつて、こんな具合のことを言っていましたよ」

「ああ、それはいい本だな」

「それでは、ちよつと見せてあげましょうか」

なんて言ったら、聖書だったと（笑）。それ式な型破りの伝道をしてくださいよ。

「日用の糧を与えたまえ」

と。それは深刻な場合が正直、ありますよね。

「涙交えて パンをあじわい」

憂悶の幾夜を 臥床のなかに

泣き明かしたる体験なければ

汝らは知れず、天つ力よ」

と。これはゲーテの有名な琴弾きの歌『ヴィルヘルム・マイスター修業時代』です。

「よそびとのパーネの味のいかに苦きか

よそびとの階段を降り昇りする

道いかにつらきかを身に閱すべし」

と、ダンテの「天国篇」の17歌に書いてある。ダンテはそういった流浪の生活を19年間やりながら、あの『神曲』を書いたのだから、驚くべきやつです。向こうの詩人では、私はダンテが何といつても一番好きだけれども。ダンテを開くと時々涙が出るよ。

● 十字架の下で解決

¹² 我らにある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。

「負債」とは、物質的には借金みたいなもの。精神的には、何か自分に間違いを犯したものの。



それを赦したる如く赦してください。神さまにお祈りする時には、先ずこちらが赦して、それでなければ聴いてくださらない。

「聴いてくだされば、赦します」

なんてはダメだ。

「もう赦しましたから」

と言って、こっちは本当に楽な気持ちになりますから、本当に

「主さま、お赦しください」

というわけですね。やはりキリストはそのところをよく御存知であって、イエスは

「そのように祈れ」

と。イエスは神さまに罪の赦しを乞う必要はない方だけでも、やはり先程申し上げました通り、我々と同じ次元に、どん底に立って、執り成してください。罪びとになっているんだ、キリストは、ある意味において。罪びとになって、ものを言っている。「ミットライデン」(mitleiden 共に苦しむ、同情する) というのは本当にその中に入って「ライデン」(leiden 苦しむ) している。

そのようにして、私たちは十字架で赦された。私たちにおいては、なぜ人を赦すことができるかというと、十字架で赦されているからなんだ、本当は。人はなかなか赦せないんだ、赦したような顔してても。ところが、十字架で本当に赦されていますから、それでもって人を赦さなかったら、それは十字架に対して申し訳ない。結局、自分の魂が窒息する。そういうように、人の関係は全部、十字架の下で解決しないような、人間の相互の心の問題はあります。いいかね。どんなに複雑怪奇な問題があっても、十字架の下に来たら、一切は解ける。もし十字架がそうでないならば、それは

「十字架を本当に受けとっていない」

ということになる。いいね。あなた方はいろんなことがあるだろうけれども、それでもう一切は解決。そうすると、相手を救っていく。これが本当の愛です。

「アモール オムニア ヴインキット」(愛は一切に勝つ)

という。「一切に勝つ」というのは一切を救い上げる。

「愛は一切を救い上げる」

と言った方が面白い、「勝つ」というよりも。何といっても、大慈大悲の世界、さっきのヨハネ書簡の愛の世界です。これは孔子も「仁」と言う。

● 千秋不動一声仁

西郷南洲の詩を紹介しよう。素晴らしい詩ですよ。

「文を学んで主無ければ痴人に等し。天心を認得すれば志気振つ。

百派紛紜ひんげん乱れて線いとの如くなれども、千秋動かず一声の仁。」



何ともいえないね、これは。あなた方はこれを読んで、感激しないですか。涙が腸の中に落ちそうだ。

「文を学んで」、学問をして、「主無ければ」、即ち学問に対して自主的でないならば。ただ知識に振り回されているような、あるいはただ知識を貯めているような、そんな在り方は本当に学んでいるのではない。

「主無ければ、それは痴人に等しい」

と。どんなに知識があつたつて、そんなものはバカ者と同じだという。痴人に等しい。そんなものを威張つたつてダメだよと。しからは、「主」とは何かというと、

「天心を認得すれば志気振うつ」

と。実は「主」は、「主」となるものは、この「天心」、天の心。天心をしかと心に認める、認め得る。即ち私たちが、天心となる。主の心、御意をわがうちに持つ。

「御意を成らせ給え」

というのは、御意がうちに入つてこなければ、成らないでしょ。自分を投げ出しているんだからね。即ち、天心、聖意、御意が入ってくる。これが主となる。学問をするときも、この天心が、そういう主がなかったらば、痴人に等しいと。私はそう読むんです、このところを強く。この「主」は即ち「天心」である。天心があれば、本当に自主的になるから。この「主」ですね。即ち、中心が無ければ学問の仕方はダメ。

私は生徒にも言っているんだ。みんな一人ひとり、生まれつきの天性、天分がある。理科系があり、文化系がある。その中で自分は理科系で天文をやるとか、あるいは工学の方とか、医学の方とか、いろいろある。文化系も、純文もあれば、哲学もあれば、法科経済もある。いろいろある。そういうものに対して、自分の天賦というもの、天賦が主になる。天賦の自覚。それが天心に通ずる。天賦の自覚があれば、そいつを中心に動いていく。

だから、読書しながら、どんどんそれを中心に吸収していく。雑多な読み方でなくなつてね。

「ノン・ムルタ、ゼド・ムルトウム」[Non multa, sed multum. nicht vieles sondern viel. not many but much. 多くではなく深く]

どうぞ、量ではなく質である。深く読むと、そこに本当の意味の幅が出てくる。ただ広く読んでいたら、深さが出てこない。

そういう「主体性」というのがそのことです。「主体性、主体性」なんて、はやるけれども、本当の意味においてはそうです。この「天心」がないとき、主体性なんてのは、今度は「自我」が動きだしてしまう、今どき言っている「主体性」とか「自由」とかは。

だから、この「天心」がある。どう考えても、この絶対界的な法則が立たなければ、もう人間は、文化文明はダメなんです。絶対に宗教が大事なんです、20世紀は。もうそれはちよつと遅いんだ、既に。もう気がついたら遅い。日本中を、草鞋を履いて歩き回つて、そのこ



とを叫ぶような青年が出てきてもいいんだよ。

「天心を認得すれば志気振つ」

と。そうすれば、本当に志気が振るう。どうも、獨協〔中高〕のやつは、志気が振るわないやつが多いから、「もつと気魄を出せ」と言いたい。

天気、元気というのは、キリストが天気であり元気なんだから。天の気である。これは聖霊です、みんな元の気は。

「天気、元気」

と見たら、直ちに我々は「聖霊」とこなくてはダメなんだ。御霊です。御霊の気、ルーアツハ、プニューマ。これが気であり、風であり、息である。

そういう志気が振るってくる。これ（天心）があるよね。あなた方もみんなそうでしょ。

「百派紛紜乱れて線の如し」

「百派」とは、党派的なもの、何々主義、何々イズム、それから宗派的なもの、みんなこれは「百派」です。ゴタゴタゴタゴタしていることを「紛紜」という。糸がからんでいるんだ、これは。そうすると、「乱れて線の如し」。もう收拾がつかない、これが無かったら。一般はそうである。

「千秋不動 一声の仁」

千秋動かず一声の仁。千年万年も動かないところのものは、ただ仁の一声であるという。天心、振。線、千、仁と韻を踏んでいるでしょ。仁の一声である。愛の一声である。大悲大慈の仁。もうこれは共通ですよ、何と言おうが。

「敬天愛人」

と言った、この西郷南洲の字は僕は大好きなんだ。いい字だね、この写真〔西郷隆盛が揮毫した「敬天愛人」の額書〕を見ていると何とも言えないんだ。これはでかい額ですよ。

私はまるで青年みたいなんだよね、こういうのを喜んで持っている（笑）。

「何だ、あれは70歳にもなって何だ？」

なんて。私は年齢は70でも、霊的年齢は20ですから。あなた方よりか少し若いんだ。

「千秋不動 一声の仁」

忘れないでくださいよ、これは。この「仁」が本当に貫く。この仁が即ち「天心」なんです。これが「主」となす。やつぱり、御霊の光で見ると、西郷南洲は、

「よし、お前は本当に分かっている」

と言ってくれるよ。

今度は、

「¹³我らを嘗試に引き入れたもうなかれ。」

誘惑にわざわざ引き入れないようにしてくださいと。しかし、転びでもって試されることがあるよ。人間は弱いから、うっかりすると足をさらわれるから。不必要な試みには、



どうぞ、引き入れないでくださいと。試みがやってきたら、そうしたら、「主さまー」

と言って、サタンを退けなくてはならない。滑ったり転んだりしても、私たちは躓いたり転んだりしますから、平伏しながらいよいよ進んで行く。神さまは、一人びとりの出来を知っていらっしやるんだよな。

「あいつはしようがないな」

なんて(笑)。しようがないやつは、しかし、よく顧みてくださっているから、「悪人正機」だから、安心してくださいよ。

「あいつは何も大して祈りもしないけれども立派だ」

なんていうやつもいるしね。しかし、どちらが本当に人間かは知りませんよ。とにかく、自己を偽らずに行きましよう。

「我らを悪しき者より救い出しましたまえ」

「悪しき者」は具体的にはサタン、また、悪しき事柄です。それから、どうぞ、救いだしてくださいと。これはもう、祈りは本当はあそこの聖意体现のところまで極まっているけれども、あとは今度は日常生活の上でまた——ちようどパウロが福音の根本を言いながらまた戒めを言うように——具体的なことを謙虚に祈っているわけです。やはり、この祈りの構造は素晴らしい。我々の弱さを知っていらっしやるから。

この主の祈りが我々に生きてきたら、もうこの通りに祈る必要はひとつもない。これが自在に自分の言葉となつて、他の表現でもつてどしどし展開していく。それが

「儀文は殺し、霊は活かす」

ということなんです。

● 祈り

終わります。あとは祈りましよう。静かに、しかし、本当の底力を持った祈りを。それでは、私が先に祈ります。

天のお父さま、また、私たちの贖い主、主さま。今晚は、あなたの二千年前に、

「祈る時は静かに閉じこもつて己という部屋の中に入って、そして、肉の耳を

閉じて、親しく見てくださっているあなたに祈れ」

と、滾々と論ごんごんしてくださり感謝であります。

主さま、あなたの御懐みふところに祈り、「主さま」と申し上げる時に、私たちはあなたの御懐の中に既に拾いあげられていることを感謝いたします。

ああ、十字架の主さま、甦りの主さま、御霊の主さま、感謝いたします。こんな野郎ですけれども、主さま、どうぞ、なおいくらでもお使いくださらんことを願ひ奉ります。

一人びとりいろいろございますが、あなたがみな天下一品として顧みてくださり、ど



うぞ、賜りたるところの存在の一番——あなたのご栄光を現す、御意の天に成っている如く、この地の一人びとりを通して、あなたが成つてくださること——これが本当にあなたの喜びであり、また私たちの讚美でございます。どうぞ、そのようにして生きることができますように。

いろいろ苦しいことがあります。涙しなければならぬこともあります。しかし、主さま、あなたのこの御霊の力はいかなる患難にも絶対に屈せず、行き詰まりを知らず、驚くべき主さま、あなたの御霊は本当の原始力であり、始めの力です。この始めにして終わりなる力を——生命、光、愛を——本当に私たちの中にいつもかくのごとく来してください。あなたは二千年のあとにこの京都の一角に本当に聖霊の祈りの場が展開していることを大喜びであることを信じております。

どうぞ、この小さな群を芥子種一粒として大事に育て、そして大きな樹にしてください。それは何も数を言っておりません。一人びとりが本当に、一人また一人と本当に存在をもつて、この道を伝え、あなたの救いを伝えて行く。それが私たちの生命です。そうでないところに救いはありません。感謝であります。

どうぞ、一人びとりを真にそのようにして、かく生きさせてください。本当です。主さま、現れてください。一人びとりを通して、あなたが現れてください。私たちはそれでなければ、生きているとは言えません。感謝です。本当に祈り、あなたが本当にご本願をもって顧み給うところに、この祈りが既に聴かれていることを真に受けとりながら、何たる力でしょう。感謝いたします。

兄弟姉妹たちを、その意味において、主さま、本当におとらえくださり、信じないところの者に何とかしてこの世界を開示して、

「ああ、そんな世界があったか」

と、あるいはお父さん、あるいはお母さん、あるいは兄弟、あるいは友人、そういった人たちに、神さま、いつかこの世界を開いてやってください。必ず勝ちます。

必ず勝ちます。この願いは聞かれます。どうぞ、主さま、この一人びとりを深く顧みたもうがゆえに、感謝です。主さま、本当に、あなたが勝たないで何が勝ちましょう。パウロが言いました、

「この主イエス・キリストの愛から私たちを離せる何ものがあるか」

と。本当に、主さま、御名を讃え奉ります。パウロさん、ヨハネさん、ペテロさんと、私たちはその信仰に生きます。ああ、感謝、感謝。御名を讃え奉ります。今、僕は言葉を知りません。…（異言）… 主イエス・キリストの御名により、アーメン。

